8 読者の広場

漢詩紀行：「王羲之考」

藤　野　仁　三※

台北の故宮博物院へは、市内のホテルからタクシーで20-30分のところにある。丘陵地の樹林に囲まれた近代的な建物で、屋根の色と形が異国の風情を醸し出している。その中に、数百年の年月を経た中国の秘宝とも言える文化遺産が展示されている。ほとんどが国共戦争時代に北京の紫禁城から運び出されたものだという。

下記の漢詩は、幾多の展示物の中の「三帖巻」を目にした時の気持ちをうたったもの。馬延基氏（台北）の行書を軸装したのが写真の書である。

「三帖巻」は書聖・王羲之の書体を今に伝える数少ない複製本だ。王羲之の三通の書簡に見える字句を一つの巻物に書き写したものだと言う。それを目にした筆者は、鮮やかな清朝・乾隆帝の観印に強い印象を受けた。「あの乾隆帝が見たものを、今自分もこうして見ているのだ」と…。

題故宮博物院

秋天宝館御林中
深院千篇書画雄
最愛羲之三帖巻
光籠観印彼乾隆
脚韻（中、雄、隆）

今年「書の至宝―日本と中国」展が東京国立博物館で開催された。国内の国宝・重文級の書が勢揃いした。中国・上海博物館からもかなりの出品があった。約一ヶ月の展示期間に延べ18万人が会場を訪れたという。

とりわけ人気が高かったのが王羲之の書。来場者はガラスに張りつくようにして展示物に見入るため、まさに牛歩の歩みであった。展示された王羲之の書10点の内9点が日本に所蔵されているもの。残りの1点が上海博物館から出品された。

なぜこのように日本に王羲之の書が多く残っていたのであろうか。本家の中国では、王羲之の書は、在世時から人気で、歴代の皇帝がその収集に努めた。それらは戦乱で散逸したり、皇帝が副葬を命じたりした。その結果、中国ではほとんど本物の所在を確認できなくなってしまった。

現存しているものの多くは、唐・太宗の収集品をトレースして模写したものだという。原本に薄い紙をのせ、文字の輪郭を精巧に書きとり、それを墨で丁寧に塗りつぶす「摸（とう）」という技法の複製本である。複製とは言え、当時、原本と寸分の違いもなかったと言われる。

そのような複製本が遣唐使により日本にもたらされた。そして千年を超える風雪に耐え、大切に保存されてきたのである。

お詫びと訂正：前号の漢詩紀行「酒家春」に脱字と誤字がありました。転句「行人欲飲新酷酒」で、酉偏に、立つの下に口と書く「醅」の字が旧漢字ということで脱けてしまいました。また、「清明」の起句、「紛粉」は「紛紛」の誤りでした。お詫びして訂正します。

※東京理科大学専門職大学院　教授